

**京都市京セラ美術館開館1周年記念展「コレクションとの対話：6つの部屋」****2021年10月9日(土)～12月5日(日)**

当館は1933年に「大正記念京都美術館」として開館しました。地道な収集を重ねてきた所蔵品は現在約3,800点を数え、特に近代日本画コレクションとしては国内有数の内容を誇り、洋画・工芸・版画についても名品が多く含まれます。今回、開館1周年記念展のひとつとして、ジャンルや時代を超えたスペシャリストが異なるアプローチでコレクションと“対話”し、作品にまつわる秘められた歴史や物語を引き出す展覧会「コレクションとの対話：6つの部屋」を開催します。6つの部屋では、現代美術家や建築家、かつて当館に在籍し草創期・転換期を支えた学芸職員、日本でのキュビズムの波及に影響を与えた画家といった面々がコレクションと“対話”し、当館の歴史や所蔵品からインスパイアされた新作の制作や、下絵を用いた展示空間の構成、また、時間を可視化する場の創出など、実験的な試みを展開します。コレクションの新たな魅力をぜひご覧ください。

**対話者**

竹内勝太郎(学芸職員・詩人)

加藤一雄(学芸職員・文筆家)

アンドレ・ロート(画家)

青木淳(建築家・当館館長)

宮永愛子(現代美術家)

ひろいのぶこ(繊維造形作家)

高橋耕平(現代美術家)



© Gottingham

主催：京都市、読売テレビ

会期：2021年10月9日(土)～12月5日(日)

会場：京都市京セラ美術館 本館 北回廊1F

開館時間：10:00～18:00(最終入場は17:30) 休館日：月曜日(祝日の場合は開館)

料金：一般：1,000(800)円 大学・高校生：500(400)円 中学生以下：無料

※( )内は前売・20名以上の団体料金。

※京都市内に在住・通学の高校生・高等専門学校生は無料。障害者手帳等をご提示の方は本人及び介護者1名無料。確認できるものをご持参ください。

前売券：8月中旬から美術館ウェブサイトで販売予定

**本展のみどころ****1. 幅広いスペシャリストの眼がコレクションに新たな光をあてる**

本展では、詩人や文筆家として活動しながら当館の活動を支えた学芸職員、当館を改築し現在は館長も務める建築家、羊毛や絹などの異素材から作品をつくる繊維造形作家、版画制作を原点に映像作品を発表してきたアーティスト、ナフタリンや塩を用いて時間を可視化する現代美術家など、多様なひろがりを持つスペシャリストが実験的な展示空間を創造し、コレクションに新たな光を投げかけます。

## 2. 建築家として、館長として。青木淳による会場構成

青木淳は、コレクションと対話する作家のひとりとして、また会場構成デザイナーとして本展に参加します。自ら改築を手がけたのちに館長を務める当館で、どのようにコレクションやその展示空間と対峙するのか、見どころのひとつです。

## 3. コレクションの隠された魅力！ 初公開を含む貴重な資料群

当館では、完成された作品ではない資料類も多く収蔵しています。例えば、糸などの素材や壁画の一部、日本画や織物の下絵などがありますが、それらは作品制作のプロセスや着想源を知るうえでは非常に重要なものです。初公開となる資料も多く、見逃せないポイントです。

## 対話者プロフィール／本展での試み

### 1. 竹内勝太郎、加藤一雄 〈ことば×日本画〉

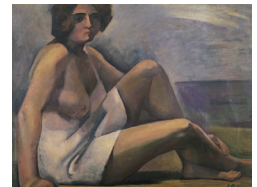
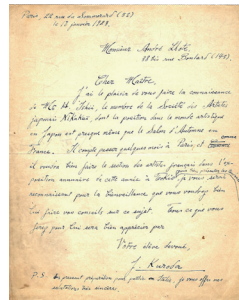
大礼記念京都美術館の構想時から京都市の学芸職員として開館準備に携わった竹内勝太郎（1894–1935）は、詩人、評論家としても活躍し、榊原紫峰ら多くの作家との人脈を持ち、開館時のコレクション形成に寄与しました。戦後、米軍接收が解除され、京都市美術館としての再開館に立ち会った加藤一雄（1905–1980）は、美術史家、評論家として魅力あふれる文章を数多く残しています。作家との密接な関係から生まれた彼らのテキストが、所蔵作品に新たな視点を投げかけます。



左) 加藤一雄 ポートレート  
右) 川村曼舟《霧水》1936年、京都市美術館蔵

### 2. アンドレ・ロート 〈西洋×日本の洋画〉

アンドレ・ロート（André Lhote, 1885–1962）はフランスで活躍したキュビストのひとりです。京都の洋画史に多大な足跡を残し、当館の洋画コレクションにおいても重要な位置を占める黒田重太郎（1887–1970）は、1920年代初頭にロートに師事し、様式化されたキュビズム絵画を描きました。手紙をはじめとする資料の紹介と両者の作品の展示を通して、同時代の美術としての西洋と日本の洋画について考察を促します。



左) 黒田重太郎からアンドレ・ロートへの手紙（1923年1月18日付）、  
アンドレ・ロート・アーカイブ蔵  
右) 黒田重太郎《渚に座する女》1922年、京都市美術館蔵

### 3. 青木淳 〈建築×日本画下絵〉

建築家で当館館長の青木淳（1956–）は、これまで多くの展覧会に参加し、作家として作品を発表する他、建築家として空間構成を手がけてきました。本展においては、所蔵品にある日本画の下絵を用いて展示空間を構成します。日本画における素描や下絵には、完成作に至るまでの発想や探求、揺り戻しや再構築といった経緯が凝集されており、青木はそこに建築図面との類似性を見出しました。展示空間を問い直し、日本画というジャンルに新たな視点をもたらす試みです。



左) 青木淳によるファサードのためのコラージュ  
右) 竹内栖鳳《写生帖（鳥類写生）》1880–1881年、京都市美術館蔵

#### 4. 宮永愛子 〈時間×工芸〉

日用品をナフタリンでかたどったオブジェや、陶器の貫入音や塩、葉脈を用いたインスタレーションなど、気配の痕跡を集めて時を視覚化する宮永愛子(1974-)は、歴史ある京都の陶芸家の家系という自身の出自を辿り、過去の時間の新たな捉え方を提示します。宮永東山をはじめとした1900-30年代の京都の工芸に触れ、幼少期から馴染みのある京都市美術館の建築空間や建築部材にも着目し、過去、現在、そして未来の時間を出合わせる場を創出します。



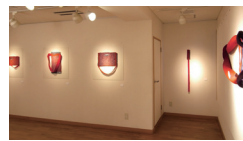
左) 宮永愛子《みちかけの透き間 - 時計 - 》2017年 写真：木奥恵三

© MIYANAGA Aiko, Courtesy of Mizuma Art Gallery

右) (初代) 宮永東山(印錦光山)《彩釉無文花瓶》1905年、京都市美術館蔵

#### 5. ひろいのぶこ 〈テキスタイル×染織〉

羊毛や絹などを中心に、紙や金属、貝釦など異素材を組み合わせ、織る・組む・縫うなどの技法によって作品を制作してきたひろいのぶこ(1951-)は、世界各地の染織技法や織物の調査を行うリサーチャーでもあります。本展では染織家山鹿清華(1885-1981)が残した糸や古裂の調査をもとに、そのユニークな作品制作について紹介します。また、山鹿清華が所蔵していたシュニール糸を用いて織作品を制作。糸が結ぶ二人の染織作家の交流によって、唯一無二の展示空間が立ち上がります。



左) ひろいのぶこ「つなぐ、、、つながる」展示風景(ギャラリー恵風、2018年)

右) 山鹿清華《手織錦屏風 立花》1935年、京都市美術館蔵

#### 6. 高橋耕平 〈映像×版画〉

普段見過ごされがちな領域に着目し、特定の場・他者・史実との対話を試み、それらに潜む歴史や物語を視覚化した映像作品を展開する高橋耕平(1977-)は、本展では自身の制作の出発点でもある現代版画に焦点を当てます。過去に自身が発表した「京都市美術館のコレクションのリストを音読する作品」をアップデートし、新たにコレクションの文字情報に着目した映像も制作。音やイメージが連なり重なる様相を通して、版画の構造や概念、コレクションの在り方について追求します。



左) 高橋耕平《作品の漂流—京都市美術館所蔵の作品について(改修中の京都市美術館前での展示風景)》2018年、京都市美術館蔵

写真：守屋友樹 © TAKAHASHI Kohei

右) 木村秀樹《Pencil 2-3》1974年、京都市美術館蔵

#### ラーニング・プログラム

出展作家によるトークや当館学芸員によるギャラリートークを予定しています。詳細は美術館ウェブサイトですら発表します。

#### 【本展へのお問合せ】

京都市京セラ美術館 広報

pr@kyoto-museum.jp 電話：075-275-4271